

草原の夢

小川未明

青空文庫

わたしは、村はずれの野原で、日の暮れるのも知らずに遊んで
 いました。草の上をころげまわったり、相撲を取ったり、また鬼
 ごっこなどをして遊んでいると、時間は、はやくたつてしまつた
 のです。

毎日学校から帰ると、家にじつとしていられませんでした。
 机に向かつて、遠くあちらの草原の方から、自分を呼んでい
 る声がきこえるようです。そして、大急ぎで、復習をすま
 すと、駆け出してゆきました。

ある日のこと、正ちゃんや、善ちゃんは、もう先に野原へいつ
 ていて、なにかしながら、わいわいいつていました。

「なにをして遊あそんでいるのだろう？」と、私わたしは、そのそばへ駆かけてゆきました。

二人ふたりは、おんばこの花はな茎くきを取とつてきて、それをからみ合わせ、相撲すもうを取とらしていたのです。太ふとい茎くきが、あたりまえなら、細ほそい茎くきより強つよくて、切り放はなしてしままうのですけれど、見みていると、善ぜんちゃんの持もった細ほそいのが強つよくて、正しょうちゃんのつぎつぎに出だす太ふとい茎くきをぶつりぶつりと切きってしまいました。

「やあ、勝かった！ 勝かった！ どんな強つよいのもも持もつておいで！」と、善ぜんちゃんは、いばっていたのです。

「善ぜんちゃんのは、強つよいなあ。だけど、こんど、僕ぼく、きつと負まかしてみせるから。」

こういつて、正ちゃんしょうちゃんは、おんばこの花茎はなぐきをさがしに立ちあがりたちあがりました。

「よし、善ちゃんぜんちゃん、こんど僕ぼくとやろうよ。」と、私わたしは、いいました。

「ああ、どんな強いつよんでもいいから、持つてきたまえ。」

善ちゃんぜんちゃんは、まだたくさんある、自分の手ての中なかの花茎はなぐきをなが

めています。そして、正ちゃんしょうちゃんのすわつていたところには、みん

な半分はんぶんに切れたきおんばこの茎ぐきがいたましく散らばつていました。

白い雲しろくもの多いおお日ひです。日ひの光ひかりは、きらきらと草くさの葉はの上うえにあた

つていました。私わたしたちは、おんばこをさがして実みのなつている長なが

い茎ぐきを抜ぬいて歩あるきました。

「こんな採った。もういいだろう……。」

走つて、私は、善ちやんのいるところへもどりました。正ちやんも、幾本となく握つて、かたきうちをしようと、勇んで駆けてきました。

「さあ、善ちやん、僕としよう。」と行って、私は、強そよなのをよつて、向かいますと、善ちやんの強い、正ちやんのをみんな切った茎が、もろく破れて、私に負けてしまいました。

「あんまり戦つたから、弱つたんだよ。」と、善ちやんは、惜しそうに、半分になつた茎を拾いました。それから、しばらく私の天下がつづきましたが、いつか、正ちやんの太い強いやつになわずに負けてしまったのです。

「堅い土かたつちに生はえている、おんばこの茎くきが強つよいんだよ。」と、正しようちやんは、大おおきな発はっけん見けんをしたように叫さけびました。

「そうだよ。人にんげん間げんだつて同おなじいじやないか……。」と、善ぜんちやんは、いいました。

私わたしは、「はたして、そうだろうか？」と、疑うたがわざるを得えなかつたのです。なぜなら、孝こうちやんの家うちは、お父とうさんがないのに、また姉ねえさんが病びょうき気で、一か家は不ふじゆう自由ゆうをしつづけている。それだのに、孝こうちやんだつて、けつして、強つよそうに、見みえなかつたからで
す。

「例れい外がいがあるさ。貧びんぼう乏にん人のほうが、金かね持もちより、病びょうき気でた
くさん死しぬんだというよ。」

「そうかい。かわいそうだな。」

みんなは、思い思いに、心の中こころなかでなにをか空想くうそうしたのであります。

このとき、行商ぎやうしやうに歩くある、三ちやんのおばさんが、町まちからの帰りかえとみえて、大きな荷おおを負おつて、原はらを通とおりかかりましたが、三人にんが、おんばこで相撲すもうを取とっているのを見みると、につこり笑わらつて立ち止たまりました。

このおばさんは、村むらでの物知ものしりでありました。よく、世間せけんを歩あるくからでありましようが、どうして、こんないろいろなことを知しっているかと思おもわれるほど、いろいろのはなし話はなしを知しっていました。なんの病びようき気きには、なんの草くさの根ねを煎せんじて飲のめばなおるとか、ど

ういう顔かおつきの人ひとは、どういいう運命うんめいをもつて、生まれうてきたと
 かいうようなことまで知しつていました。そうかと思おもうと、いま西さい
 いきよう
 京きやうでは、ここういいう着物きものの柄がらがはやるとか、東とうきやう京きやうの人ひとは、
 ここういいう品しなを好このむとか、そそういいうような話はなしも知しつていました。
 しばらく、だまこどもつて、子あそ供どもたちの遊あそぶのを見みていいましたが、お
 ばさんふしぎは、また、おんはなしばはなしここについて、不ふ思し議ぎな話はなしをしたのであり
 ます。

わたし
 私わたしは、そそのはなしとおぼきの話はなしを覚おぼえていいます……そそして、いいつにななつて
 もおおそそらく、忘わすれることはなしはないでししょう。おおばはなしさんはなしの話はなしには、
 |おおんはなしばはなしここは、不ふ思し議ぎな草くさだ、おおよよそ、ここの草くさの花はなの茎くきは、一ほん本ほん
 が普通ふつうである。ししかし、ままれには、二ほん本ほんの股またに分わかれた茎くきがある

ということでした。そのおんばこそ、この世よの中なかの神祕しんぴを解といてみせる力ちからがありました。神かみさまは、たまたまこうして、草木くさきに、自分じぶんの力ちからを示しめすといふのです。

「金かねのわらじをはいて、さがしても、二股ふたまたのおんばこがあつたら、取とつておくものだ。この野原のほらに、こんなにかくさんあるが、二股ふたまたのおんばこはないかね？」と、おばさんは、いいました。

「おばさん、いくらさがしたつてないだろう。」

「ないということもない。あるといふ話はなしだから。」

「おばさん、あつたら、なんにするの？」

私わたしたちは熱心ねっしんに、おばさんの話はなしに耳みみをかたむけていました。

昔むかしから、勞ろう症しょうといふ病やまいはあつたのだ。ぴんぴん働はたらいていた

ひと
 人が、だんだん元気が衰えていつて、青い顔つきになり、手足が
 やせて、目ばかり大きく見え、そして、どこが悪いということも
 なく死んでしまう、いまは、結核なんていうが、昔は、魔が
 いて、人間の生き血を吸うのだといったものだ。それを、二
 股のおんばこを乾しておいて、燈心のかわりに、真夜中、病
 人の眠っているまくらもとにともすと、そのへやの中に同じ
 人間が、二人まくらを並べて、うりを二つに割ったように、か
 わらずに眠っている。その中の一人が、ほんとうの人間で、一
 人が、魔物の化けたのだ。それはいくら親兄弟でも、見分け
 がつかないという話だ……。」

おばさんの話は、奇怪であります。みんなは、聞いているうち

に、きみがわるくなるりました。野原の上はには、日ひがあたつていたけれど。

「おばさん、ほんとうのこと……。」

「ああ、それで、まもの魔物をころ殺してしまえば、ほんにん本人のびようき病気はたす助かるが、あやまって、ほんにん本人をころ殺したら、とりかえしのつかぬことになってしまう。だれにも、その見み分わけがつかないから、どうすることもできない。」

「まもの魔物だと思おもって、にんげん人間をころ殺してしまつたら、たいへんだからね。」と、しょう正ちちゃんは、かんとん感あんんしていいました。

「それで、どうしたらいいの？」と、ぜん善ちちゃんは、おばさんの意い見けんをき聞いたのであります。

それは、おばさんにもわからなかつたようです。

「なにか、しるしをつけておいたらよさそうなものだが、それが魔物まものだから、なにをしたって知しっている……。こればかりは、どんな勇氣ゆうきのある人ひとだって、思おもいきつてやることはできないよ。まあ、魔物まものを見るだけでも、二股ふたまたのおんばがあればできるから、見みつかつたら、取とつておきなさいね。」

「おお大きな荷にを負しよつたおばさんは、のここういう残のこしていつてしまいました。」

私わたしたちは、もう、おんばこで相撲すもうを取とることなどは、忘わすれてしまつて、おばさんのいつたことが、ほんとうかと議ぎ論ろんしました。

「ふたまた二股のおんばこなんて、どこにもないものだから、はなしそんな話

を作ったんだね。」

「そうかもしれないよ。また、肺結核にかかれば、たいていなおらないから、そんな話を作ったのかもしれない。」

「きつとそうだよ。ありそうで、なかつたり、なおりそうで、なおらないようなものを昔の人は、たとえ話に作ったのかもしれない。」

三人は、思い、思いの意見をいいましたが、私は、またしても孝ちゃんの哀れな姿が目につかんだのでした。

「貧乏でも孝ちゃんは、強くないよ。そして、姉さんも、工場へいつていたのが、病気になるって帰ってきたのだろう。孝ちゃんはお母さんを助けて、納豆を売ったり、近所のお使いな

どをしていたのに、このごろ、顔つきがわるい。姉さんの病気がうつったのだろうというぜ。もし、それが、ほんとうだったら、かわいそうじゃないか……。」と、私は、いいました。

「ほんとうに、かわいそうだな。」と、正ちゃんも善ちゃんも、急に、しおれたのです。

「僕は、孝ちゃんの背中せなかに、ほくろのあるのを知っているよ。いっしょに、川かわで泳およいだときに見みたんだもの……。」と、善ちゃんぜんがいいました。

「僕ぼくも知しっている。」と、私わたしも、孝ちゃんこうの背せ中なかのほくろを思おもい出だしました。

「悪魔あくまに知しれるといけないから、だまっておいで……。」と、正しょう

ちやんがいました。

三人は、それで、おばさんのいったことがほんとうであつてくれれば、いいという気に、いつしかなったのです。それなら、三人の力で、悪魔を殺して、哀れな孝ちゃんの一家を救つてやりたいという気になつたからでした。

「二人の孝ちゃんが、まくらを並べて眠っているんだね。そうしたら、すぐに、二人とも着物を脱がしてみるのだ。そして、ほくろのないのは、悪魔だから、そいつを殺してやるんだ。すると、孝ちゃんの病気もなおれば、また、姉さんの病気もなおつてしまふだろう。」

「悪魔は、ほくろのあることを知っているだろうか？」

「知っていたっていいよ。僕は、いつか孝ちゃんが転んで、どこかにちよつと傷あとのあるのを知っているのだ。」と、善ちゃんが、いいました。

「どこに？」と、正ちゃんが、たずねた。

「悪魔が聞いているといけないから、だまっていよう。」と、善ちゃんは、注意深くいいませんでした。

「それにしたって、二股のおんばこを、見つけなければだめだろう……。」と、私がいっただので、

「みんなで、どうしても、二股のおんばこを見つけよう。」と誓って、三人は、熱心に草原を、二股のおんばこを見つけて歩きまわったのです。

「見つかれしよ、見つかれしよ、二股のおんばこ見つかれしよ。」

白い雲は、無心に空を流れてゆきました。いろいろの虫が草

原から飛び立ちました。キチキチと翅を鳴らして、ぼったが飛

ぶかと思うと、大きなかまきりが、頭をもたげました。そのほか、

美しいちようが花にとまっていたり、へびが光る体をあわてて、

草深い中に隠すのもありました。

三人は、この夏の真昼間、不思議な夢を見つづけて、日のうす

暗くなるまで、野原の中を駆けまわっていたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育研究」

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「草原《くさはら》の夢《ゆめ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2020年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

草原の夢

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>